

ベルマーク大使に就任、新納啓介社長にきく

協賛会社のあいおいニッセイ同和損害保険



④「支援活動にゴールはない。地域密着でずっと取り組んでいきたい」と新納社長。ブラジル人学校の支援も始めたという
⑤ベルマーク大使の委嘱状を持つ新納社長

新しくベルマーク大使に就任した新納啓介さんに6月28日、ベルマーク財団から委嘱状をお渡ししました。新納さんは4月に協賛会社あいおいニッセイ同和損害保険（ベルマーク番号92）の社長に就任。前社長の金杉恭三さんから大使を引き継ぎました。



「サステナビリティの一環でクリーンアップ活動や植林活動に取り組んできた当社ですが、コロナ禍の中、在宅でできるベルマーク活動を再認識しています」

山間部や島々、被災地の学校を支援するといったベル

マークの理念は同社が行動指針に掲げる「地域密着」と密接に関わるといいます。契約の一つひとつが、お客さま一人ひとりの課題解決につながるからです。

同社が中期経営計画のコンセプトとして掲げるのが「CSV × DX」。CSV（Creating Shared Value = 社会との共通価値の創造）は、自社の強みを用いて社会的課題の解決をめざす考え方。DX（Digital Transformation）はデジタル技術を通じて提供する価値を変革させること。この2つを推進して社会に貢献することが世界企業の潮流であり、同社は率先して実践しているそうです。

「社会との共通価値をつくっていくCSVの発想は、山間部の小規模校や被災地校などの教育の不平等をなくそうとするベルマーク活動の思いにも合致します」

そう考える背景には、自身の英国・ロンドン体験があります。小学5年生からの数年間と、2011年からの駐在員時代にロンドンで暮らした際、社会の多様な価値観の大切さを学びました。「現地の小学校に転校した1970年代後半には、まだ英国では差別意識などもあり、嫌な思いもしましたが、最後は仲良くなりました。この経験もあり、いつも相手をリスペクトしてきました。そんな思いが、人を支え続けていこうという今の考えや行動のベースにあります」

ご自身でベルマークを収集することはもちろん、会社で集めたものを持ち帰り、自宅で奥さまと仕分け作業をしたりすることもあるそうです。「大使として、これからも社員、代理店や地域のみなさまと共に、ベルマーク活動を強化していきたいですね」



あいおいニッセイ同和損保は2001年から協賛会社として自社商品にベルマークを付ける一方、3000社近い代理店や地域と連携して自らもベルマークを収集し、各地の学校や財団に寄贈してきました。この日、東京・恵比寿の本社をお訪ねした際も、2021年度に集めた145万点余のベルマークを財団に贈呈してくれました。

黄色いすべり台がやってきた

千葉・木更津市立八幡台小

千葉県木更津市立八幡台小学校（土生こずえ校長、児童803人）に5月、ベルマーク預金で買ったすべり台が届きました。滑降部があざやかな黄色で、とても目立つピカピカのこのすべり台は協力会社の内田洋行から購入しました。子どもたちは大喜びで、休み時には行列ができるほど人気です。

以前あったすべり台は、学校が創立された1981年当時のものでした。過去5年ほどお買いものをしておらず、ベルマーク預金が多まったため、学校と保護者で何を買おうか考えた際、すべり台の更新に決めました。古

い台の撤去費用や設置費用もかかるため、PTAと、保護者・教員・地域の方でつくる教育後援会も協力して資金を上積みし、計94万円をねん出したそうです。

八幡台小は、創立当初からベルマーク運動に参加。PTAのベルマーク委員会とボランティアで仕分け・集計などの作業をしていたほか、地域の公民館にもベルマークの回収箱があり、定期的に学校に持ってきてくれるそうです。

同校の都築光教頭は「皆様のご協力が子どもたちの笑顔につながりました」と話してくれました。



新しいすべり台には順番待ちの列ができる（提供・八幡台小）

瞳を輝かせる子どもたち 各地で教室開催

岐阜・高山市立荘川小で理科実験教室

岐阜県の高山市立荘川小学校（早川秀樹校長、児童37人）の体育館で7月4日、「理科実験教室」が開かれました。全校児童に加えて、2キロほど離れた市立荘川中学校の生徒25人も集まり、にぎやかな教室となりました。理科実験教室は、ベルマーク財団のへき地学校支援事業のひとつです。1999年に第1回の教室が開かれ、これまでに237回開催。この日が今年度初めての開催となりました。

今回、講師を務めたのは、サイエンスものづくり塾エジソンの会（華井章裕代表）の6人です。

教室の前半は、サイエンスショー。特に盛り上がったのは、子どもたちが持ち寄ったバラやあじさいの花、キャベツなどの野菜を液体窒素につける実験です。どれも手で挟んでたたくとこなごなになってしまいました。子どもたちは目を

キラキラと輝かせ、「冷たい」「すごい」という声があちこちから上がりました。

後半は小学生と中学生に分かれて、ものづくりを体験しました。筒の入れ物に千代紙を貼り、先端にビー玉やビーズを入れて作る「万華鏡」、色とりどりのテープを棒に貼り付ける「くるくるレインボー」を作りました。作っているときの子どもたちは真剣な表情でしたが、完成すると笑顔がはじけました。



愛知・岡崎市立宮崎小で一輪車講習会

愛知県の岡崎市立宮崎小学校（佐橋康仁校長、児童16人）で7月4日、財団のへき地学校支援事業「一輪車講習会」が開かれました。

今回の講師は、国内外のさまざまな一輪車の大会で優勝などの実績を数多く持つ佐藤彩香さんと小木真由子さんです。二人はまず、参加した1年生から6年生までの14人に、模範演技を披露。華麗な演技に初めは拍手をするのも忘れるほど、子どもたちは見入っていました。

実技指導では、より細やかにアドバイスできるよう、1・2年生と3～6年生の二つのグループに分けられました。初めて乗る際の姿勢や目の位置など「基本動作」から教わり、練習を重ねると、見る見るうちに一人でも乗れる人が増えました。講師の二人が、児童それぞれの進み具合に合わせた指導をしていくと、難し

い「跳び乗り」にチャレンジする人も出現。成功した時には、周りから大きな歓声が上がりました。

講習会の最後、児童によるお礼の言葉では「難しい技には、まだまだ時間がかかりそうですが、放課後も練習を続けていきます」と話があり、意気込みが伝わってきました。講師は「これからも教え合いながら、どんどん練習してください」とエールを送りました。

